

<p>LIFE - 人間と人間の文化を学ぶ</p>	<p>キーワード：直接体験 資料収集 探究活動 疑問の発掘</p>
<p>文字の歴史を考える ＜ 配当時間数 12時間 ＞</p>	
<p>文字の歴史は5000年以上になる。普段使っていないがあまり意識していない、文字に潜む文化を、いろいろな角度から探究し、その文化の背景についての理解を深める。</p>	

1. 単元の目標

文字には、さまざまな文化と、膨大な時間がかかっている。絵画で伝達した時代、文字が生み出された時代・文明、文字の発展していく過程、活版印刷が考え出され普及していく時代、活字が手軽にあつかえるようになった現在。そのような中から、個々の生徒がそれぞれのテーマを見つけ出し考えていく。

人間がコミュニケーションの手段として創り出した文字を考えることによって、いろいろな疑問・課題を解決していく方法と能力を高める。

2. 単元の構成と特色

＜ 体験を通して ＞

粘度に葦の茎、パピルス・羊皮紙に羽ペン、亀の甲羅、木・竹に毛筆、紙に毛筆。書く道具と書かれる素材によって必然的に文字の姿が決まってくる。ここでは、楔形の線はなぜそういう形なのか、ゴシック体などの線の細太はどうやって出すのかを実際に刻んだり、書いたりしてみる。粘土板には、絵文字を書くよりも楔形を刻む方が楽であるというようなことを、体験を通して理解する。また、印刷のひとつとも考えられる拓本をグループに分かれて採る。



＜ テーマに沿った資料を探す・調べる ＞

かなりの分量の資料は準備するのであるが、それ以外にも自分で興味のある分野・テーマを探して本やインターネットでさらに探求していく。どのような資料を、どのように集め、どう使えば良いのかを学ぶ。

第4章 LIFEの事例

<自分なりの答えを考え、レポートにまとめる>

ここであつかう内容は、大概はつきりした答えのない疑問である。それに対して、資料を整理し、考えを進め、自分なりの結論を導き出し、まとめていく。一問一答形式ではない問いへの答えを考えることで、いろいろな問題に対する解決能力を養う。

3. 主題に迫るための手だて

聞くだけ、調べるだけの姿勢に終わらないように進めていく。例えば、講義形式の場面も多くなるが、その時には、次回にやる内容についてあらかじめ調べさせたり、考えさせたりしておく。そうすれば、受身ではなく主体的に聞くことができる。

目標となる課題、テーマを設定して疑問について調べ、さらにそこから出てくる疑問を調べていくというふうに、周辺の事柄まで幅を広げて考える。生徒から出てきた意見等はできるだけ返し、全体でいろいろなテーマについて考えるという雰囲気を作りながら進める。

4. 単元における評価の観点・方法

文字に対する興味・関心・知識・意欲・態度

文字を書いたり、刻んだりしたものは、その都度提出させる。また、何回か課題を宿題として出す。次回までに調べたり考えたりして提出させる。提出物の深まりであるとか、広がりであるとかを逐次見ていく。

文字の歴史をいろいろな角度から捉え理解し判断する能力

文字の歴史を文字のみならず、他の歴史であるとか、いろいろな事象などと結びつけたりしながら、自分の考えをまとめることができたか。



5. 教科等との関連

文字をあつかうのであるから、当然語学関係の教科との関連は深い。文化の比較、文字の成り立ちの歴史などを考えていくので、地理・歴史・社会科学あるいは芸術の分野とも関連する。また、いろいろな用具や素材をあつかったり考えたりするのは、理科学的な内容も含めて考え合わせなければならない。

日本語をはじめとするさまざまな言語の文字を探求していく中で、文字の原点を知ることであるとか、文字を中心とした新たな歴史観・地理観というものが育まれたりしながら、別な角度からそれぞれの教科を捉え直し、より理解が深まるのではないかと考えている。

7. 指導のポイント

<生徒に考えさせること>

文字に関して体験させ、資料を提示し、幅広く考えさせ、そのあとそれぞれのテーマを選択してまとめさせる。

時代が経つにしたがって、文字はどのように整理され発展したのか。

地域・文化によってどのように文字は変化し多様化したのか。

[書き手の問題]

書記など一部の人が文字をあつかっていた時代から、大半の人が文字を使用する時代への変化を考える。

[用具等の問題]

書くものと書かれるものの関係の中で文字はどのような必然で変化してきたのか。

[表意文字と表音文字の問題]

大半の国では、表意文字から表音文字へと移行しているが、それはなぜか。中国ではなぜ完全な表意文字を現在でも使用しているのか。

[文字の系統樹]

アジアだけでも、大きく分けて、漢字系・アラビア系・インド系の文字がある。現在も絵文字を使用している地域もある。多様な文字を比較しまとめることによって何が見えてくるのだろうか。

[書字方向の問題]

文字使用の初期段階には、書字方向は一定しておらず、文字の向きも書字方向によって変化するということが見られる。それが整理される過程を考える。

[印刷の歴史]

手書きの文字が使用される一方、同じ文書等を大量に作る努力もおこなわれてきた。ゲーテンベルクによって完成されたといつてよい活版印刷であるが、それ以前にはどんな試みがあったのかを探る。

以上のようなことを踏まえて考えていくのが、東洋と西洋の文化の違いである。文字の生み出された背景、それぞれの文字使用による文化への影響。その単純ではない相互作用を考えることにより、東洋と西洋の長い年月の積み重ねによってできた文化の差を理解していく。



第4章 LIFEの事例

<評価についての考え>

出発点は同じであっても、行き先がそれぞれ異なるため評価は難しいが、目標の設定の仕方、どれほど幅を広げることができたか、角度を変えて考えることができたか、あるいは到達度など、いろいろな観点から評価をする。

<考えを広げたり、深めたりするための手立て>

ひとつの疑問に対して、ひとつだけの答えを出さない。例えば、「縦書きと横書きは何が違うのか。横書きでは、対称的な書き方が簡単にできるが、縦書きでは考えにくい。

これは、自然の摂理と何か関係あるのだろうか。」とか「表意文字から表音文字への流れについて。日本語の音に漢字を当てはめていったときに、必然的に表音文字化しなければならなかったということから、いろいろな言語で表音文字を使用している事実を考えることができるか。」というように、周辺的な事柄まで広げて考えたり、探求したことを応用できるかというようなことに重点をおく。

生徒から出てきた意見・考え等で参考になるものは、できるだけ授業で提示し、他者の考えを取り入れることによって、新たな知を創造していく。その過程で当初の考えよりも、どれだけ見方が広がったり、深まったりしたのか。それまでの蓄積や変化を追っていく。それと同時に、生徒にも振り返らせながら、それまでやってきたことの意味を理解させていく。



<まとめ>

文字や文字の歴史を考察することを通して、身近で当たり前だと思っていたことにも疑問を感じたり、ひとつの物事でも角度を変えて見ることができるよう態度を養う。そして、それを解決していくためには、どの本を調べるのか、どのホームページを検索すればよいのか、そのあとそれを元に自分としてはどう考えていけばよいのか、というような方法を生徒一人ひとりが身につけていく。



